
アリバイ崩し

滝龍太郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アリバイ崩し

【Nコード】

N0009J

【作者名】

滝龍太郎

【あらすじ】

刑事である、会田のアパートの風呂場に犬の死骸が投げ込まれた。

その時間、あるスナックのママが殺された。

殺されたスナックのママ文子には腹違いの妹がいて、その妹と文子は以前一緒に住んでおり、なんとその部屋が会田の部屋であった。

会田は変な臭いで目が覚めた。それは魚か動物が腐ったような臭いであつた。

（なんだ、この臭いは）

万年床から這い出し、台所へ行つてみた。

（おかしい。最近、家で食事は取つてないはずだが）

玄関の方へ行きかけ、ふと立ち止まった。

（風呂場の方だ）

強烈な臭いが風呂場の方から漂つて来る。扉はいつも開けてある。

会田が中を覗いた。

「何だ、これは？」

犬の死骸が浴槽の中に投げ込まれていた。しかも半分腐りかけていて、ひどい悪臭が立ち込めていた。

会田は咄嗟に玄関に走り、外に出た。

そこは木造アパートの二階で外側に廊下があり、だれかが窓の外から投げ込んだものに違いない。

会田は辺りをキョロキョロ見回したが、それらしい人物は見当たらず部屋に戻った。

会田は風呂に入った後、湯気を抜くためにいつも風呂場の窓を開ける。古ぼけた木造アパートなので風呂場に換気扇がなく、窓を開けておかないと風呂場がカビてしまう。いくら頑丈な格子が付いていても、いつもは寝る前にきちんと閉めるのだが、昨日は夜中の三時過ぎに帰つて来たのでそのまま寝てしまったらしい。

会田は警視庁捜査一課の敏腕刑事で、まだ独身である。郷里は茨城の片田舎で両親とも健在だ。早く嫁を貰えと最近はしょっちゅう

う電話が掛かって来る。

三十も半ばを過ぎれば、親とすれば当然心配の種である。

本人はまだ独身でいたく、親からの見合い話を何度か断っている。とにかくこの死骸を何とかしなくては。一体何の目的でこんなことをしたのだろう。まして半分腐りかけているし、持ち運ぶだけでも大変である。それを二階のこの狭い隙間から投げ込むなんて、そりゃ刑事だから今までに何人もの人間を刑務所へ送り込んで、恨んでいる人間もいるかも知れないが、こんな嫌がらせをされる覚えはない。

会田は死骸に新聞紙を掛け、ビニール袋に入れた。臭いはまだ強く残っている。シャワーを一番熱くして跡を流した。そして、部屋に戻りあれこれと考えてみた。

昨日帰って来たのが午前三時過ぎ、そしてシャワーを浴び水割りを一杯飲んで寝た。おそらく四時頃だと思う。そして新聞配達が来るのが五時頃だから、その後に投げ込まれたに違いない。これだけ臭ければ新聞配達のお兄ちゃんに分からないはずがない。

そして、六時には外は薄明るくなる。そんな物を持ってうるつけるわけがない。とすると、この一時間の間ということになる。

今は七時半である。今日は日曜日なので回りの人たちはまだ出てきてない。

(良かった)

三十半ばの独身男の部屋から異臭が出たとすると近所で何を言われるかわかったもんじゃない。そうじゃなくても毎日夜中に帰って来ているため、回りではどんな噂が飛び交っているか分からない。会田は着替えて外に出た。風呂場の窓の格子にいくらかの血が付着していた。これをきれいに拭き取り、一階に降りた。廊下から階段へ、足元を丹念に調べたが血の跡らしきものはまるつきりなかった。

階段を降りるとすぐに道路になり、そこにも何の痕跡もなかった。

犯人は車で来て辺りの様子を伺い、二階の会田の風呂場に投げ込んだに違いない。ビニール袋が何かに入れて運んでいるはずだ。

ということは、それをその辺に丸めて捨てるだろう。人間の死体とかであれば当然それは証拠を残さない為に焼き捨てるかするけど、たかが子犬の死体を包んでいただけなら、だれしもその辺に丸めて捨てるはずだ。その袋にもかなりの臭いが付いているはずである。車にわざわざ持ち帰ることはしないと思う。

会田はアパートの裏庭へ回り、辺りを見たがそれらしい物は発見できなかった。

部屋に戻り一服していると、署から殺人事件の一報が入り新宿へ直行した。

2

会田刑事の家は西武新宿線の下落合にあり、駅から歩いて五分ほどの所で、閑静な住宅街の一角にある、木造二階建のアパートである。何回となく警視總監賞を貰い、敏腕刑事として署内でもてはやされていた。

新宿歌舞伎町に直行した会田刑事は、既に到着していた相棒の吉川刑事に概略を聞いた。吉川刑事とはかなり長くコンビを組んでいる。

吉川は去年結婚をし、練馬に在る警察官舎に入っている。まだ二十八歳である。

事件は、繁華街から一本入った雑居ビルでの出来事だった。

新聞配達人が、二階にある『アンド』というスナックの前を通りかかった時、いつも閉まっているドアが開け放たれており、不審に思い中を覗いたところ、床の上に女性が倒れていた。それを見てすぐに警察に通報した。

被害者は、『アンド』のママの石川文子であった。死因は絞殺で衣服の乱れはなく、売上金はそのままのため怨恨の線が有力であ

る。

カウンターの椅子が一つ倒れていて、その横に石川文子が倒れていた。この状況を見ると、二人でカウンターの椅子に腰掛け、犯人がトイレにでも立つ振りをして、後ろからヒモか何かで首を絞めたに違いない。

会田刑事はそう推理した。

さつそくスナックママ、石川文子殺しの捜査本部が設置された。会田と吉川は周辺の聞き込みを開始した。

雑居ビルは五階建て、一階は居酒屋が占めており、二階三階はスナックや赤ちょうちんが入っており、全部で六軒ある。そして四階五階はオフィスでそれぞれワンフロアを使っている。

会田は近所にあるその新聞店の、第一発見者である配達人にその時の様子を聞きに行った。

朝十時を少し回った時間だったが、その人に会うことができた。Y大学に通う苦学生であった。今日は午後からの講義ならば午前中はここに居た方がいいよと、店の主人に言われていた。警察から何か聞かれるかもしれないと、店の主人の配慮であった。

「君が第一発見者ですね」

「はい」

「その時の様子を私にくわしく話してくれないか？」

苦学生らしく襟を正して会田に向かった。名前は秋山一郎、Y大学の二年生である。

「いつもあの辺りは五時半頃に配達をします。一階に郵便ポストがあり、以前はそこに入れていたのですが、たまに新聞が盗まれるんです。それから上まで持って行ってます」

「それは大変だ。下のポストなら楽でいいのに」

「ええ。でもエレベーターがありますから」

「それで一軒一軒配達をして発見したわけですね」

「そうです」

「二階の『アンド』にも配達をしてるわけですね」

「いや、二階三階は取っていません」

「と言つと？」

「エレベーターが故障していて、非常階段で五階まで昇りました。私が配達するのは四階と五階だけで、二階には寄る必要はないのですが、二階の扉が開いていたので変だなと思って覗いてみたのです」

「なるほど。二階の扉が開いていたんですね。その扉は非常扉ですね」

「はい、そうです。二階はスナックばかりなのにおかしいなと思い入ってみたのです。そしたらスナックのドアが開いていて、恐る恐る覗いてみたら人が倒れていたんです」

「それで警察に連絡したんですね」

「そうです」

「何か変わったことはありませんでしたか？」

秋山はその時のことを思い出そうと、腕を組み目を逸らせた。

「たとえば、物音が聞こえたとか、だれかに会ったとか、どんなことでもいいですから思い出して下さい」

「びつくりして階段を駆け降りましたからね。何も気がつかなかったです」

「そうですか。では何か思い出しましたらすぐに連絡して下さい。お手間を取らせました」

会田刑事は秋山と店主に挨拶をして、新聞店を出た。

「ごくりうさま」

会田刑事はロープの前にいた警官に敬礼をして中に入った。エレベーターはそのまま故障の札が付いている。まだだれも手は触れられない。二階に上がると鑑識の人たちが指紋を採ったり、写真を撮ったりしていた。

「じくろうさま」

会田はだれにとはなく挨拶をした。スナックの中はボックス席が三つ、カウンターには椅子が八つあり隅の方にカラオケセットが置いてあった。現場には犯人のものとと思われるものは何もなかった。二つのグラスに水割りが半分づつ残っているだけであった。ママの石川文子と犯人が飲んでいたに違いない。

そして犯人はトイレに立ち、後ろから犯行に及んだと思われる。会田はこの推理は当たっていると思った。そして顔見知りの犯行。

二階には後二つスナックがあり、その二つのオーナーのところには吉川刑事が今行つてるところである。

会田は五階まで非常階段をゆくりとした足取りで昇り、その扉を押してみた。小さなフロアがありすぐ隣がエレベーターであった。エレベーターには同じように故障の札がかかっていた。

その向いが。○商事とドアにプラスチックの板が付いていた。念のためノックをしてノブを回してみた。日曜日なので当然かもしれないがノブは回らなかった。

四階も同じで、三階へ降りてみた。三階はスナックが一軒と居酒屋が一軒、それとおでんと看板に書いてある一杯飲み屋が一軒入っていた。当然この時間、しかも日曜日にだれも居るわけがなかった。会田は一階に降り、ワンフロア全部を使っているチェーン店の居酒屋の前に立ち、腕組みをした。

（こんな小っちゃなビルにスナックやら居酒屋が七軒も入って、よくやっていけるな）

感心しているところへ、吉川刑事がやって来た。

「先輩、二階のスナック二軒共、昨日は土曜日だったので客の入りは悪く、十二時頃に閉めたと言ってます。今は土曜休みの会社が増えてきてさっぱりだと言ってます」

「そうか、土曜日の休みがこんなところにも影響してるんだな。それで？」

「ええ、二軒共閉める時は『アンド』の灯りはついていたらって言うっ

てます」

「それが十二時頃だな」

「そうです」

「それで何か気づいたことは？」

「何も変わったことはなかったと言ってます。殺人事件なので、真剣に思い出してくれって言ったんですけど、びっくりしてまして」

「そうか。で従業員は？」

「何でもアキちゃんという子と、エミちゃんという子が居るそうです」

吉川が手帳を見ながら言った。

「でも、二人の居所は知らないって言っていました」

「そうか、今日は日曜日だから明日の夜にならないとその二人は出て来ないか」

会田は二人の名前を手帳に書き、一旦署へ戻った。

被害者石川文子は、東池袋のマンションに一人で暮らしていた。五年前に離婚しており、子供はなく、身内は山梨の実家に年老いた母が一人で暮らしている。母親は小さな雑貨屋をしており、父親は三年前他界している。父が亡くなった時、文子は郷里に帰ってない。なぜ帰らなかったのかは分からないが、母親はひどく嘆いている。

文子には腹違いの妹があり、五年前に文子が帰った時に初めて会っている。その時文子と父親が大喧嘩をして、文子は二度と戻らないからと言いついて出て行ったきりだという。

母親は文子が殺されたことに大変なショックを受け、捜査員と一緒に上京した。

「今その腹違いの妹、田上淳子を捜している。母親が言うには、その時、つまり五年前に文子が現れた時、顔を見合わしたただけだと言っている。そして十七の時、つまり三年前父親の他界と同時に、私

も東京へ行くと出て行ったきりだということだ」

本部長は報告書を見ながら説明した。

「文子は東京の大学に入りそのまま卒業と同時に結婚をしてしまった。こんなことになる、予想もしなかった父親は激怒して、二人を引き離そうとしたが失敗に終わり、父親は文子の代わりに淳子を入れた」

「なかなか面白い筋書きですね」

吉川は興味のある顔をした。

「ところが母親はびっくりした。その時淳子は十五歳。淳子の実の母親は一年前に癌で亡くなっている。淳子は一人で中学に通い、卒業と同時に家に入れて貰った。母親は文子の代わりと、しかたがなく諦め、実の娘と思い可愛がっていた」

「なるほど、母親も今さら責めてみたところでどうしようもないと思っただな」

会田は感慨深くそう思った。

本部長がそこまで説明をした時、机の電話が鳴った。石井刑事からであった。石川文子の元夫、横井和雄に会って来たことを話した。

横井は、五年前別れてから一度も文子とは会ってなく、連絡もないとのことだった。横井は杉並のアパートで一人で暮らしている。

横井と文子は大学の時に知り合って恋愛に陥り、そのまま卒業と同時に親の反対を押し切って結婚をしている。しかし、必要以上に親の反対に遭い、二人は次第に意見が合わなくなり二年で破局を迎えている。

横井の親はせっかいいい大学に入って、これから将来があるのにまだ早すぎると反対をしていた。そして、文子の父は卒業したら郷里へ帰って来るものと思っていた。

今回の殺人事件について、横井には何の動機もなく、アリバイもあった。

その日の夕方、阿部亜紀子と西田恵美が捜査本部を訪ねて来た。スナック『アンド』の従業員、アキちゃんとエミちゃんである。「助かったよ、明日の夜にしなければ会えないかと思っていたよ」会田が優しい顔をして言った。

「ニュースを見てたらママが殺されたっていうので、びっくりしてエミちゃんに連絡して二人で来たんです」

阿部亜紀子が早口で喋った。二人共神妙な顔つきで会田を見た。「なんで殺されたのですか？ どうしてこんなことになったんですか？」

「ちよつと待つて」

会田は手を広げて、二人の言葉を止めた。

「その前に聞きたいことがあるのですが」

「・・・」

「昨日は何時頃店を閉めましたか？」

「昨日はお客さんが少なく、最後の山本さんたちが帰ったのが確か十二時頃か、少し過ぎた頃だと思うわ」

亜紀子が思い出しながら喋った。

「それは確かですね？」

「ええ。お客さんの一人が腕時計を見て”もうこんな時間なんだ”って言うって時計を見たら十二時ちよつと前でしたから」

「それで？」

「それから少しして、山本さんがそろそろ帰ろうとお勘定をしてみましたから、確かだと思います」

「なるほど。その山本さんというお客さんが最後なのですね？」

「そうです」

「それからすぐ閉めたのですね」

「ええ。でも私たちは先に帰ったので、その後のママの行動は分からないわ」

「一緒じゃなかったのですか？」

「ママはいつも、少し飲んでから帰っていたみたい」

「そうですか。その時何か変わったことはなかったですか？ 何か気がついたことでも」

「特に変わった様子はなかったと思います」

「ママはだれかにしつこくされているとか、人に恨まれているとか、そんなことはなかったですか？」

「別にないと思うわ。しつこくしているお客さんもいなかった様だし」

「ママに特別な人はいましたか？」

「分からないわ。そういう素振りはなかったから」

二人で頷いた。

「そうですか。ところであなたたちは学生？」

「そうよ。Y大学の生徒です。スナックはバイトです」

Y大学と聞いて、どこかで聞いたことのある名前だなと会田は思った。

「そうですか。後からでもいいですから、何か気づいたことがあったら教えて下さい」

「はい」

「あなたたちの聞きたいことは？」

「ママがなぜ殺されたのか聞きたいの」

「それは我々が知りたいことです。顔見知りの犯行ではないかということは分かっています」

「殺された時間は？」

「まだ鑑識の結果が出ていませんので何とも言えません」

阿部亜紀子と西田恵美は署内をキョロキョロ見回して立ち上がった。

「それでは、何かあったら連絡致します」

「ぜひお願いします」

会田が名刺を差し出した。

「あつ、それともう一つ聞いてもいいですか？」

会田が思い出したように聞いた。

「はい」

「あなたたちが帰る時、隣と前のスナックは閉まっていましたか？」

「ええ。灯りは消えていましたね、土曜日なので早く閉めたみたいねって話してたの」

「そうですか。いや大変ありがとうございました」

文子は毎晩店が終わると一人で酒を飲んでいた。そして文子の愛人か何かは分らないが訪ねて来て、一緒に酒を飲んで殺された。

例えば、文子の愛人と店が終わった後いつも二人で酒を飲む。

その男は常に憎悪の心を持っていて、何らかの話の行き違いで殺した。十二時過ぎから五時半の間に。

相棒の吉川刑事に、会田は自分の推理を話した。

「でも、ママにはそれらしい人の噂もないんですよ。毎晩店が終わってから来ていればだれかしら目撃してると思いますがね」

吉川は、文子の愛人説を否定した。

文子は友人もほとんどなく、東池袋のマンションにも人が訪ねて来たということはまったくなく、管理人が証言している。

十一年前、山梨から一人で東京のアパートに住み、大学へ通っていた。そして横井と知り合い半同棲生活をし、卒業と同時に二人は結婚した。しかし、親の反対もあってかどうか分らないが二年で破局がきて別れている。それが二十四歳の時、それ以後文子は何をしていたか空白である。そして二年前文子が二十七歳の時スナック『アンド』を出している。

スナック『アンド』は店子として入っており、ごく一般的に不動産屋から紹介されて借りているのである。又、東池袋のマンションも賃貸であり、家賃はそう高くなく文子の私生活は質素であった。人に恨まれることもなく怨恨説は薄らいでしまった。

ただ、田上淳子が気掛かりであった。

石川文子が、二十四歳で離婚をし、二十七歳にスナック『アン
ド』を出すまでの三年間の空白。

田上淳子は、十七歳の時に父が他界、その時山梨を飛び出し、
現在二十歳。その三年間の空白。

文子は五年前、山梨に一度帰って、淳子と会っている。そして父
と大喧嘩をし、それ以来帰ってない。父が他界をした三年前にも帰
っていない。

淳子が飛び出した時は十七歳、その時文子は二十六歳。淳子の
空白はその十七歳から今日までの三年間。そして文子の空白は二十
四歳から二十七歳まで、この間文子の二十六歳から二十七歳までの
一年間は淳子の空白とダブる。

その一年間は淳子が出家をした十七歳から十八歳の間で、最初の
一年間である。東京に親類や知り合いのいない淳子は、文子を頼っ
て上京したに違いない。

母親は文子の居所を知っていて、それを淳子が嗅ぎ付けたので
あろう。

会田は母親に会いに署を出た。古ぼけたその旅館に母親の姿は
なく、すでに引き払っていた。文子の遺骨を抱いて山梨に帰ったら
しい。

会田は吉川を淳子の捜査に残し、一人山梨へ向かった。

新宿から中央本線で小淵沢まで行き、そこから小海線で甲斐大
泉という駅で降りた。田園風景が一面に広がり、のどかな景色が目
に入った。ハケ岳が目の前に迫り、肺の中の薄汚れた空気がいつべ
んで洗われる気がした。

若者は都会に憧れて出て行くらしいが、最近ではUターン現象が
始まっていると聞く。会田もできればこういう所で一生を送りたい
と思っている。

駅前の小さなたばこ屋で場所を聞くとすぐに分かった。

「東京の刑事さんかい？」

「ええ」

「ふみちゃんが殺されたうちゅうのは本当かい？」

小さな町だけに余計なことは言えない。

「まだはつきりはしないのですが」

会田はたばこを一本取り出した。

「石川文子さんはどんな人かご存じですか？」

「ふみちゃんは母親思いの良い子だったが、父親が他に女を作って子供まで生ませよって、それでふみちゃんは怒ってな」

会田は文子のことを色々と聞き、たばこ屋を出た。

文子はこの町の人気者で、父親も母親も得意になっていた。東京の大学が受かった時も町の人たちが大勢でお祝いに来て、それは大変な騒ぎだったらしい。それが卒業と同時に結婚をし、その後郷里には一度も顔を見せず、両親としてみたら肩身の狭い思いをして来た。それ以来、父親は酒浸りになり、体を壊して他界してしまった。

そして今度はこの事件、町の人たちは呆れてしまっただれも石川の家には寄り付かなくなってしまった。人なつっこそうなそのおばさんは、寂しそうに教えてくれた。

会田は戸の閉まった小さな雑貨屋を訪ねた。

「ごめんください」

当分の間休みますと貼り紙がしてある戸を叩き、中を伺った。

「どちらさまですか？」

「警視庁の会田です」

「まあまあこんなとこまで」

すぐ分かったらしく母親が戸を開けてくれた。

奥の間に案内され、そこには文子の遺骨が置かれてあった。まだ文子の写真は置いてなく、点けたばかりの線香から煙が上がっていた。会田は焼香をして、母親に伺った。

「淳子さんが家を出た時に、どこへ行ったか分からないとおっしゃってましたが、文子さんのところへ行くつもりではなかったのですか？」

「いえ、あの子は文子の居所は知らないと思います」

「でもお母さんは知っていたわけでしょ」

「ええ、私は何度か手紙を受け取っていたので居所は知ってましたけど」

「その手紙は今ありますか？」

「ええ。ちよつとお待ち下さい」

母親はタンスの一番上の小さな引き出しから、文子の手紙を三通出してきた。

「これがそうです」

「ちよつと拝見してもよろしいですか？」

会田は封筒を手にとって裏を見た。そこには三通とも何も書いてなかった。

「中を拝見してもよろしいですか？」

「どうぞ」

最初の一通目は横井と幸せにやっていることが書いてあり、居所も書いてあった。会田は練馬区上石神井と住所を手帳に書きしるし、二通目を読んだ。中身は母親への気遣いと自分の生活のことが書いてあり、住所は同じ場所が記されていた。三通目も同じような内容であったが、住所は記されてなかった。

読み終わって封筒の中に手紙を入れ、消印を見た。一通目の日付を追ってみると文子家が家を出た翌年になっている。その時、練馬に居ることを知らせている。二通目も同じ消印でその約一年後になっている。ところが三通目は消印が違って新宿の局である。日付はスナック『アンド』を出す半年前である。

おそらく居所を新宿の局のある所へ変わったか、それともたまたま手紙を新宿から出したのかそれは分からない。

文子の住民票は練馬の上石神井で間違いはない。その時からず

つとそこに置いていて、東池袋に移ったのはつい半年前である。不動産屋から契約書の写しを見た時も、その日付とさほど前後はしていない。

母親に挨拶をして、会田は甲斐大泉を発った。署に連絡をしたが、依然淳子の足取りは分かってない。

会田は帰りの電車の中で考えた。あの手紙を見なければ、淳子は文子の居所を知ることができない。あの時の淳子は、それを見ることのできる状況にはない。それとも手紙は三通ではなくて四通あったのかも知れない。

会田は推理した。

淳子は文子の居所が知りたくて手紙を盗んだのかも知れない。家に預けられた二年間、文子の母親とはほとんど口を利いてない。もちろん文子の居所を聞くことはなかった。いつか家を出て東京へ行くつと虎視眈々と狙っていたに違いない。文子とは腹違いの姉妹である、行けば拒むことはしないだろうと。

会田の推理は進行して行く。

ただ最後の手紙になぜ住所が書いてなかったのか。今は違う所に住んでいると母親に教えたのかも知れない。それは練馬の方に便りを出されても居ないからと暗示しているようである。そして、今住んでいる所は教えたくない状況なのかも知れない。

(きつとそつだ)

殺される半年前までそこに住んでいたわけだ。母親はそのことについてさほど疑問はもたなかったと言うが、その後から東池袋に越したからと電話があつたと話していた。

会田は、新宿の郵便局の区域内に、この答えはあると確信した。住所の記されていない手紙の日付前に、その場所に住んでいるわけだ。

会田は会議の席上で手紙のことを詳しく説明した。

早速、新宿の郵便局の区域内の不動産屋に、その当時の契約書がないか調べた。また所轄にその当時の様子を聞き回った。

不動産屋の帳簿から意外な事実が浮かび上がった。その手紙を出す三日前、石川文子他一名という賃貸契約書が見つかった。なんとその場所は、会田刑事が現在借りている部屋だった。会田は目をまん丸にしてその不動産屋に、

「なんだって！」

と、勢いよく聞き返した。

文子は一人で来て部屋を決めて行った。他一名というのは妹だという。次の日、トラックに所帯道具を積んで来て、不動産屋さんにも挨拶をしたという。

会田は文子と淳子の写真を見せ、確認してもらった。

そして、二人は共同生活を始めたが、その後文子は東池袋のマンションに越している。そして、その後に会田刑事が何も知らずにそのアパートに入った。

その時何かがあって二人は別れたわけだけど、何があったのか。会田はさっそく自分のアパートの住民全部に身分を明かし、当時の二人の様子を細かに聞き出した。結果はごく普通の姉妹で、二人とも派手なところはなく、顔が合えば挨拶もするし、感じはとても良かったらしい。

隣の人は、夜遅く姉妹喧嘩みたいのを一度聞いているが、後は何もなかったと言っている。その頃の姉妹は夜の勤めをしている様子で、昼間は良く二人で買い物に出掛けたりしていた。一緒に家を出て、夜中に帰って来ていたのは、隣であれば分かることだろう。

スナック『アンド』を始めたきっかけは、淳子とのことがあったからかも知れない。

スナック『アンド』の当時の様子を探り出せば大体のことが掴めそう。

会田と吉川はその線を探り出した。

三年前に『アンド』はオープンした。その時は文子と淳子は一緒に住んでいたわけだ。

アキちゃんとエミちゃんは、半年前に入ったばかりだから何も知らないと思うけど、吉川にもう一度当たるように指示した。

会田は隣と向いのスナックを攻めることにした。向いのスナックはオープンしてまだ三ヶ月足らずで何も掴めなかったが、隣のスナックからは重要な情報を得られた。

『アンド』がオープンする時、挨拶に来たという。会田は淳子の写真を見せた。間違いなくこの人だという。

「それで、この人も手伝っていたのですか？」

「ええ。ママとこの人、確か・・・ジュンコって言うてたと思うけど」

会田は核心に触れてきたなと思った。

「他にだれか居ましたか？」

「もう一人女の子が居たわ。確か、その子の友達でアルバイトって言ってたけど。名前は忘れたわ」

そのスナックのママは、『アンド』のママ文子が殺されたことなので、会田に好意的に話してくれた。

「その子は来たり来なかったりだった様ですけど、若い男の子が一人カウンターの前に居たわ」

会田はビクンとした。刑事の感かも知れない。

「その若い男というのは？」

「確かイチローちゃんて言ってたわ」

「イチローちゃんね。何イチローだか分からないかね？」

「イチローちゃんとしか言ってなかったから、分からないわ」

「それで、そのイチローという男の人は幾つぐらいでした？」

「そうね、二十歳くらいに見えたけど」

「どんな子だったか覚えてますか？」

「ええ。口数の少ない真面目そうな子だったわ」

色々聞き出した。イチローという子は背が高く、おそらく一メ

ートル八十近くはあったという。アルバイトで学生だったらいい。聞きづらかったのだが、文子とはどの様な感じだったか聞いてみたが、二人の間に特に目立ったところはなかったという。それでは淳子とはどうだったかという質問には、よく二人で帰って行ったところを見たという。

大体のことが掴めて来た。

会田は署に帰り、吉川の報告を聞いた。

阿部亜紀子と西田恵美が勤め出したきっかけは、Y大学の友達が勤めていて、店の女の子が急に辞めてしまったので、二人が勤め出した。

しかし、その子はママと喧嘩をして、アルバイトの子を辞めさせてしまい自分も辞めたらしい。そして、そのY大学の友達というのが、そこでバーテンをやっていた秋山一郎という名前だったという。その子も間もなく辞めたらしい。

はて、どこかで聞いた名前だなと会田刑事は考えた。吉川刑事も署に帰る間考えていたが浮かばなかった。

会田は手帳をパラパラとめくり、

「あっ！」

と、叫んだ。

8

秋山一郎。文子が殺された第一発見者である。

「もしもし。×新聞店ですか？」

「はい」

「秋山一郎君は、今居ますか？」

「いえ、居ません」

会田と名乗ると、店主はよく覚えていた。秋山は大学じゃないかという。

「確かY大学でしたよね」

「そうです」

「ありがとうございます」

会田は秋山のアパートを訪ねた。当然居るわけがない。

その頃吉川はY大学に行き秋山を訪ねたが、今日は来てないと言われた。

会田と吉川は一旦署に戻った。

一本の線が繋がって来た。秋山一郎と淳子が深い仲になり、それを文子が咎めて何かが起こったに違いない。秋山を追及すれば必ず何かが出てくる。それにしても依然淳子の行方が分からない。

その夜、会田と吉川は秋山のアパートを張った。しかし、その夜は帰って来なかった。時計は午前一時を指している。

「おかしいですね」

吉川が口を出した。

「そうだな、何かあったな？ 新聞配達には直接行くのかな？」

会田は不審に思った。吉川を残して三時過ぎに新聞店に行った。

「あつ、刑事さん。こんなに早くに」

店主は驚いた顔をした。時間が時間なので不安な顔をして聞いてきた。

「何かあったんですか？」

「いや、秋山君にもう一度あの時の状況を聞きたくて来たのだが。・

・・・なんせ第一発見者ですからね」

あまり刺激をしてはならない。

「いつも四時頃には出勤しますので、どうぞ掛けて待っていて下さい」

人の良さそうな店主は笑顔を作って会田を招き入れた。

「実は今日刑事さんから電話があった後ひょっこり来ましてね、バイクを貸してくれと言うもんだからいいよと言って貸したんだが」

「えっ、あれから来たのですか？」

「ええ。荷物を運ぶためにバイクが必要だと言うので、バイクを戻すのは明日の朝来るときでいいよと言ったんですけど」

荷物を運びたいからバイクを貸してくれ、一郎は何を運んだの
だろう？

「それで私が電話したことは言いましたか？」

「ええ、昼間刑事さんから電話があったことを伝えました」

「その時、秋山君は何か言いましたか？」

「いや、いつもの真面目な顔で」そうですか」と、顔色も変えずバ
イクを転がして行きましたけど」

四時になっても秋山は来なかった。会田は考えをまとめた。も
し秋山が犯人なら動機は何か？ 淳子とできていてその仲を文子が
裂こうとしたのか？ それで秋山はカツとなつて。もしそうだとし
たら、秋山のアリバイはどうだろう。

四時に新聞店で仕分けをして、四時半に出発をしている。文子
の死亡推定時刻は午前四時から五時の間。新聞店からスナック『ア
ンド』までバイクなら五・六分で行ける。警察に通報した時間は五
時三十五分、犯行に及ぶ時間は、何とかある。

「おやじ」

「はい」

人なつっこい店主は仕分けの手を休めて会田の方に顔を向けた。
「秋山君が死体を目撃した当時、秋山君の配達区域の中で何か苦情
はなかったかね？ たとえば遅く配達されたとか」

「そういう電話はなかったですね・・・」

念のため、店主は女房に聞いて、苦情の電話は何もなかったと
確かめた。

「そうですか。ところで今日みたいに、何の連絡もなく、出勤しな
かったことは、今までに・・・」

会田が言いかけている途中で、店主の女房が口を出して来た。

「いえ、こんなことは今まで一度もないですよ」

店主は秋山の分も自分で配達をするらしく、仕分けした新聞を
持ってバイクで出掛けて行った。

秋山のアパートはもぬけの空であつた。昨日、バイクに積めるだけの荷物を積んで出て行つたと、隣の学生が目撃している。吉川はその時の様子を聞き、署に戻つた。

会田も九時まで新聞店に居たが、秋山が来たらすぐ連絡をもらうことにして署に戻つた。

どういふことだろう。会田は秋山の実家へ、吉川は再びY大学へ、それぞれ飛んだ。

ちょうどその頃、文子の元住んでいた下落合周辺の聞き込み捜査をしていた、石井刑事の班が妙なことを聞いた。

近所の学生の証言だが、当日の明け方近く、おそらく動物の死骸ではないかと思われる、かなり悪臭を放つ箱を、手に持つて歩いている男とぶつかったと言うのだ。ただコンパの帰りのため、かなり酒に酔つていたので完璧な記憶ではなかったと言うが。

その男は背の高いやせた男で、目をギョロつかせ箱を抱いて歩いていたらしい。千鳥足で帰つて来た学生は足がふらつき、その男と肩がぶつかり箱を落とした。箱の中を見た学生は動物の腐った異臭に気分が悪くなり、その場で吐いてしまったと言っている。

そして、その男は急いで箱を拾い、走るように去つて行つたという。文子の元住んでいたアパートの方へ行つたと証言した。つまり会田の住んでいるアパートの方である。

秋山の実家は栃木の片田舎にあり、年老いた夫婦には詳しいことは触れず、秋山のことを聞いてみたがここ三ヶ月ばかり何の連絡もないとのことだった。老夫婦は心配した様だが、心を落ち着かせさせた。そして、会田は老夫婦のことが少し気かりだったが帰つて来た。

一方、Y大学の方は前日に休学届が出されており、秋山の友人関係を洗つたがだれも知らないとのことだった。

吉川は空しくなり、署に戻つた。

署に戻った会田は本部長から下落合の死骸の件について聞かされた。

「えっ、死骸を持った男に会った？」

会田はすっかり忘れていた。当時のことを本部長に詳しく話し、会田と吉川はその目撃者の家へ飛んだ。

下落合の会田のアパートと、目と鼻の先であった。時間は正確ではないが、お開きした時間から追っていくと五時頃じゃないかという。そして秋山の写真を見せると、間違いないとのことだった。その男は顔色一つ変えず箱を拾って行ったという。顔に特徴はあまりないが、びつくりした様子も見せなかったので却って記憶にあると言った。

これが秋山に間違いないとなると、四時半に新聞店を出て五時少し過ぎには、下落合に来て居なければいけない。しかも犬の死骸の入った箱を持って。バイクで直行すれば来れないことはないが、でもその後、五時半に新宿へ戻って来てから文子を殺して、五時三十五分に警察に電話を入れる。これは不可能である。

秋山にはアリバイが成立する。犯人は秋山ではない。そこで一つ疑問が残る。五時三十五分に警察に電話をしている点だ。

これはおかしい。その時間には俺の風呂場に死骸を投げ入れて、まだ新宿に向かっている時間だ。

「吉川君、君はあの時何時に『アンド』に到着した？」

「私は署に居ましたので五時四十五分には着いていました。それが何か？」

「その時秋山は居たかね？」

「そつえば見なかったような気がしますね」

「それだ！」

会田は手を叩いて大声を出した。

「いいかね、私の推理が正しければ犯人は淳子だ」
「はあ？」

吉川が首を傾げた。

「当日、私は四時頃に寝た。そして悪臭がすごいので起こされてしまった。それはまあいいのだが。秋山が犬の死骸を五時過ぎに俺のアパートの風呂場へ投げ込んだ」

「なぜですかね」

「まだあそこに文子が住んでると思っていたんじゃないかな。そしてその頃『アンド』では、文子と淳子が最後の乾杯をしていた。そして文子は殺害され、秋山は五時半頃に『アンド』に電話を入れ、淳子に殺したかを聞き、秋山はそこから警察に電話をした。いかにも自分が発見したかのように」

吉川が唸った。

「当然、殺害現場には秋山が居るわけがない。まだ、新宿に向かつてバイクを飛ばしてるわけだ」

「でも時間が足りないですね」

「何の？」

「新聞配達は全部行われていたわけですよ」

「それはその後に配達をしてもだれも文句を言う時間じゃない。まして『アンド』の近所は淳子でもできる」

「なるほど」

吉川は感心した。

「でも、なぜこんな手の込んだことをしたんでしょうね？」

「それは淳子をかばって、秋山が犠牲になろうとしているんじゃないかな。刑事が迫って来た時、自分が殺ったと……」

「何か可哀想ですね。殺した動機は何でしょうね？」

「秋山と淳子の恋愛を、文子が邪魔をしたんだと思うんだが……
。しかし、他にもまだ何かありそうだな」

秋山一郎と田上淳子を、全国に指名手配をして一ヶ月が過ぎた。

依然二人の居所は分からない。

会田は山梨の文子の墓へ行った。帰りに実家に寄り、年老いた母親に会った。

「お元気ですか？」

「ええ、その節は文子のことですぐとお世話になりました」

「いえ、気の毒なことをされました。ところで淳子さんからは依然何もありませんか？」

「何もありません。あの子はその秋山とかいう人と一緒なんですか？」
「きつとそうだと思います」

人なつっこい笑顔は深い皺で覆われていて、あきらかに淳子を中心に心配する顔がそこにはあった。墓参りに来た旨を伝え、会田は別れた。秋山の実家、栃木にもあれから何度か足を運んでいる。老夫婦の心配そうな顔がいつまでも頭に焼き付いて離れない。

しばらくして、意外なところで二人は発見された。

群馬県渋川署からの連絡で、二十歳前後の男女が山中で首を吊っているのを営林署の人が発見した。遺書が三通あり、その中に警視庁の会田刑事宛のものがあるということだった。

会田と吉川は渋川署へすっ飛んだ。確かに秋山一郎と田上淳子のものであった。

遺書は秋山の両親に宛てたものと、文子の母親宛に淳子が書いたものと、会田刑事に宛てたものであった。

その内容は会田刑事の考えていた通り、淳子をかばって自分が自首をして全てを治めようとしたが、会田刑事の執拗な追跡に疲れってしまったと書いてあった。

会田と吉川は、山梨と栃木に重い足取りで向かった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0009j/>

アリバイ崩し

2011年1月28日04時40分発行